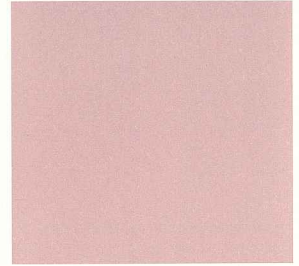
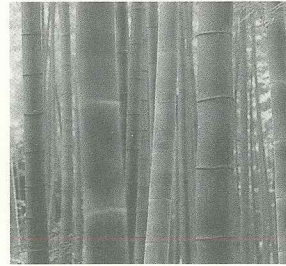
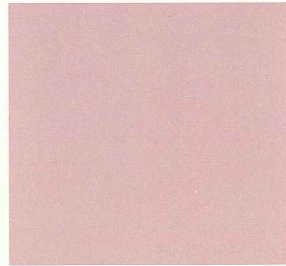
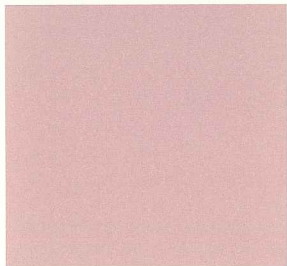
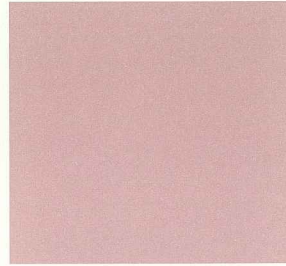
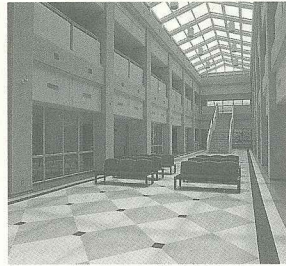
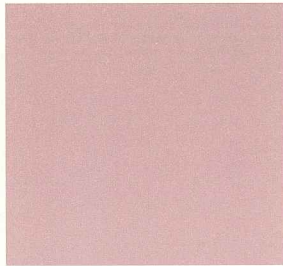
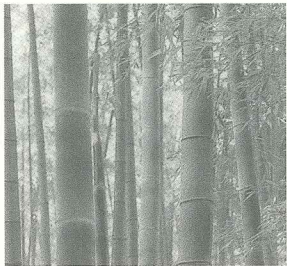




[季刊] 立命館アジア太平洋大学プロGRESS・レポート 2001年

立命館アジア太平洋大学

PROGRESS REPORT



vol. 15

EARLY SPRING 2001

『世界の世紀』への第一歩

株式会社住友銀行 特別顧問

巽 外 夫



新年明けましておめでとうございます。二十一世紀の門出を迎え、皆様とともに改めて喜びを分かち合いたいと存じます。

振り返りますと、二十世紀は「アメリカの世紀」とも言われ、米国の活躍が際立った百年でした。自動車文明、テレビ放送、月面着陸、さらにはIT革命等、様々な場面で米国が二十世紀の先導役を果たしてきました。そして今や、米国スタイルの文化やビジネスまでがスタンダードとして全世界に発信されている感があります。

では、これに続く二十一世紀はどのような世紀になるのでしょうか。

IT革命とグローバル化のなかで米国のプレゼンスが一段と高まる可能性は否定できません。ただ私は、米国がひとり世界をリードするのではなく、各地の国々がこぞって人類の発展に寄与する可能性を持った偉大な世紀になると期待しております。

IT革命やグローバル化は情報の壁、国境の壁の急速な消滅をもたらします。世界の国々の人がこれを前向きに受け止め、壁の向こうにあるチャンスを掴み取っていくことが出来れば「アメリカの世紀」ならぬ「世界の世紀」が実現できるのではないのでしょうか。

もちろん、このためには、チャンスをものできる人材の育成に努めていかねばなりません。

当立命館アジア太平洋大学は、在学生の半数にもおよぶ海外からの留学生を受け入れ、極めて多様な人材間の相互交流に取り組んでいることに加えて、まさに実地に根ざした専門知識や技能の修得にカリキュラムの重点が置かれております。この点、新たな世紀における競争と共存のためのスキルを有した国際的人材の育成が図られるものとアドバザリー・コミッティの一員として大いに期待致しているところであります。

本年は新しいミレニアムの初年にも当たりますが、西暦一〇〇一年から始まった第二ミレニアムにおいて最初に成し遂げられた人類史的な偉業は紫式部の源氏物語だそうです。これにあやかるわけではありませんが、第三ミレニアム最初の偉業も日本発のものとしてほしいところです。世界初めてのユニークな試みである当大学が二十一世紀を「世界の世紀」とするための第一歩を刻み、歴史に名を止めるほどの大いなる成果を上げられることを、年頭に当たり心より祈念致します。

新春のごあいさつ

明けましておめでとうございます。

二十一世紀を迎えた新年にあたり、ひとことご挨拶申し上げます。

二〇〇〇年四月、立命館アジア太平洋大学（A P U）が大分県別府市に誕生して、はや九カ月が経ちました。

「二十一世紀のグローバル社会で各方面のリーダーとして活躍する人材を養成する大学」を目標に開学いたしましたA P Uには、四月および十月の入学式を経て、地元九州のみならず日本各地から入学者を迎え、海外からはアジア太平洋地域を中心に世界四十六カ国・地域から優秀な国際学生が入学してまいりました。現在、A P Uでは、優秀で大志を持った国際学生四百二十一名、国内学生四百八十四名、合計九百五名の学生が学んでいます。このことは、世界各地の若者が、二十一世紀型の新しい大学、A P Uに大きな期待を寄せてくださった証であると考え、次第です。A P Uは、その基本コンセプトに、学生の五〇%、毎年四百名を世界五十カ国・地域から迎えるという、我が国でかつて試みられたことのない多文化、多言語のマルチカルチュラル・キャンパスを築くことを掲げてまいりましたが、おかげさまで開学初年度からこれをほぼ実現することができました。

このような到達点を築くことができましたのは、設立準備の早い段階からご協力ご助言をいただいた国内外のアドバイザー・コミッティの皆様方をはじめ、各界、各方面の皆様方からの物心両面にわたるご支援とお励ましの賜物でございます。あらためまして心から御礼申し上げます。

さて、二十世紀末の十年間の社会動向に鑑みますと、新たに迎えたこの二十一世紀には、社会的・経済的にも、技術的にも、また文化的にも二十世紀とは異なる大きな変化、展開が予測されるところでございます。

大きな展開の一つは、二十一世紀が『アジア太平洋の時代』となるであろうということと存じます。そして、地球上のこの地域に住む私共には、積極的に自らの力でこのような時代を築き上げ、人類社会の進歩に対する貢献を成し遂げていくことが求められています。これまでの数世紀にわたる近代文明の蓄積をさらに新しい次元に磨き上げ、また、この中で残されてきた地球環境問題などの課題の解決に道筋をつけ、人類社会の明るい展望を切り拓いていくのが二十一世紀における『アジア太平洋時代』の責務と存じます。

このような課題を達成するための最大の力は、何と申しましても有為の若き人材でございます。私共立命館アジア太平洋大学は、微力ではございますが、二十一世紀におけるアジア太平洋の未来創造を担い、人類社会の明るい展望のために貢献できる人材の養成に役立ちたいと念じております。

APUもいよいよ二年目を迎えます。四月には二期生が入学し、キャンパスは一層活気に溢れることとなります。二十一世紀への夢と希望に満ち、各々の国・地域の発展に向けた課題や期待を担ってAPUに集う学生たちの熱い思いにこたえるべく、大学関係者一同、より一層全力を傾注してまいる所存でございます。

皆様方におかれましては、是非APUキャンパスをご視察いただき、大学の状況を具にご覧いただきましたら幸いです。

これまでのご支援に対しまして、あらためて御礼申し上げますとともに、今後とも一層のご教示、ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

立命館アジア太平洋大学長 坂本 和一



十一月四日と十一日の両日、立命館学園創立百周年および立命館アジア太平洋大学開学を記念した国際シンポジウムを開催しました。

今回のシンポジウムは、「アジア太平洋学の構築」を共通テーマとし、「アジア太平洋におけるマネジメント教育のあり方」について検討する第一部と、「アジア太平洋学の構築―新しい視点と課題」について検討する第二部で構成され、世界十カ国・地域から研究者が集い、熱心な議論が行われました。

第1部 アジア太平洋における マネジメント教育のあり方

第一部では、アジア太平洋地域におけるビジネス・マネジメント教育の特質や、それが欧米のマネジメント教育と比較してどのような独自性を持ちうるかなどについて、北米・アジア・オセアニア地域のビジネス・スクールの学部長など第一線で活躍の研究者を招聘し論議を展開しました。

冒頭、一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授でAPU客員教授の野中郁次郎氏、ハワイ大学経営学部長デビット・マクレイン教授から基調報告をいただきました。

野中教授からは、豊富な事例研究に裏づけられた組織的知識創造論の提起がありました。そのなかで特に、経験と知識との緊密な内部的連携が生み出した日本企業の経験と、知識の客観的な役割が重要性を持つアメリカ企業の経験を結合した知識創造の教育を大学において進めることの重要性が示されました。また、知

立命館学園創立100周年・立命館アジア太平洋大学開学記念

国際学術シンポジウム開催

シンポジウム実行委員長 APU副学長 慈道 裕治

International academic symposium



識創造の観点から文化の役割や東洋と西洋を結ぶ可能性についての課題が提起されました。

マクレイン教授からは、ハワイ大学のMBAで日本コースや中国コースを開発された経験を踏まえて、グローバルな観点でビジネス教育を推進することの重要性が強調されました。さらに、世界的な標準が進むからこそ、地域の特徴や個性を意識した教育が望まれること、そのためには日本やアメリカなど各地域において行われる具体的なマネジメントの事例を解明していくことが重要であると指摘されました。

その後、「アジア太平洋地域の実践」に関するラウンドテーブルが開かれ、シンガポールマネジメント大学副学長のタン・テックメン教授から今後のアジア地域における経済上の課題とそれに向けたマネジメント教育の課題が問題提起されました。これを受けて米国とアジア・オセアニアのビジネス・スクールの学部長等から、それぞれのビジネス・スクールの事例について紹介があり、欧米型のマネジメント教育に学びつつ、欧米とアジアの双方の社会的・文化的特性を取り入れた、独自のマネジメント教育のスタイルについて多角的な議論が行われました。最後に、立命館大学入原正治教授が、APUが二〇〇三年に大学院開設を予定しており、アントレプレナーシップ教育が重要であることと、それに向けてインキュベーションづくりやケース教材開発に取り組みたいとする立命館からの提案を行いました。

全体の討論を通して、教材開発に向け協力の取り組みやITを活用した協力

など、アジア太平洋地域におけるビジネス教育のために協同して取り組む課題が多く議論され、第一部は終了しました。なお、第一部は日本経済新聞社の後援をいただきました。

第2部 アジア太平洋学の構築 ―新しい視点と課題

第二部では、二十一世紀において中核的役割を果たすことになるといわれているアジア太平洋地域を対象とした新たな研究のあり方について多角的分析を試みました。

まず、朝日新聞社編集局特別編集員・コラムニストでAPU客員教授の船橋洋一氏、APU坂本和一学長による基調報告が行われました。

船橋洋一氏からはアジア太平洋地域におけるグローバル化の進展に伴う基本課題の提起があり、それを解決するには北東アジアと東南アジアの関係を構築すること、アジアと太平洋地域の新しいネットワークを構築することが重要であり、APUはネットワークの重要性を戦略的・経済的・政治的な方向から探究する大切な場であると指摘されました。つづいて、坂本学長から「アジア太平洋学の理念と研究課題」について提起があり、「アジア太平洋学」の研究において、従来の地域研究を基礎としながらもそれを超えて問題解決をめざす政策学としての見地や文明の学としての「アジア太平洋学」の見地が重要であるとの提起がありました。その後の討論では、グローバル化と地域的特色との関連などが議論になり、特に文明論との関連では国

連が二〇〇一年を「文明間の対話の年」としている点でシンポジウムのテーマの重要性が指摘されました。

「アジア太平洋研究の現状について」のラウンドテーブルでは、シンガポールのチャイニーズ・ヘリテッジ・センター所長キー・ブーコン教授から、地域性の理解と研究の方法についての課題提起があり、それをめぐって討論が行われました。討論では、「アジア太平洋」という地域性へのアプローチの方法やアジア太平洋地域の発展のダイナミズムとこの地域の抱える共通課題の解決を模索する新しいタイプのアジア太平洋研究についての多角的な議論が展開されました。最後に、立命館大学国際教育・研究推進機構長のモンテ・カセム教授が、教育研究の国際化とそのため学生・教員の交流などの方針を提起しました。

第一部、第二部ともに会場には貴重なディスカッションを聴講しようとAPUの学生・教員など約百名が参加し、盛況のうちに幕を閉じました。

今回のシンポジウムは、アジア太平洋学構築に向けた問題提起と積極的な討議の場となり、あわせてアジア太平洋地域における教育研究ネットワーク構築のための大きな一歩ともなりました。現在、立命館大学およびAPUでは国際的に活躍し得る人材を育成し、研究を推進するため大学院の設置や大学院改革を進めています。これらの課題の遂行にあたって、こうした国際的なネットワークが今後ますます重要な役割を担うことになると考えています。このシンポジウムの成果は報告書としてまとめる予定です。



◎シンポジウム出席者【第一部】(順不同)

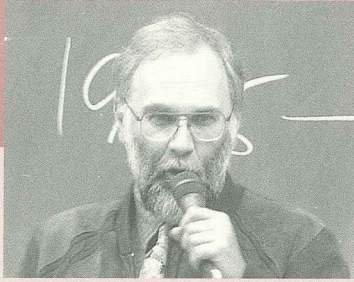
氏名	所属	役職	国名	スバチャイ, ヤブラハス	アセアン大学連合	総長	タイ
野中 郁次郎	一橋大学	大学院国際企業戦略研究科教授	日本	タン, テックメン	シンガポールマネジメント大学	副学長	シンガポール
マクレイン, デイビッド	ハワイ大学	経営学部長	アメリカ	ツイ, カイチョン	シンガポールマネジメント大学	商学部長	シンガポール
チョイ, サンムン	釜山国立大学	大学院経営学部長	韓国	山下 義通	21世紀産業戦略研究所	社長	日本
グッドマン, ルイス	アメリカン大学	国際関係学部長	アメリカ	ユ, リ	東北財経大学	MBAセンター所長	中国
井上 隆一郎	桜美林大学	経営政策学部教授	日本	ユン, ケソップ	ソウル国立大学	経営学部長	韓国
キム, ドンキ	高麗大学	大学院経営学部名誉教授	韓国	千代田 邦夫	立命館大学	経営学部長	日本
キム, ヒュンクック	アメリカン大学	アジア研究センター所長	アメリカ	久原 正治	立命館大学	経営学部教授	日本
ムン, プングン	釜山国立大学	経済学部教授	韓国	坂本 和一	立命館アジア太平洋大学	学長	日本
オブライエン, グレグ	ラトロブ大学	法律経済学部	オーストラリア	慈道 裕治	立命館アジア太平洋大学	副学長・アジア太平洋マネジメント学部教授	日本
バシュキョド, ブラボン	タマサート大学	先端教育学部	タイ	近藤 健彦	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋マネジメント学部部長	日本
スコージー, マイケル	ラトロブ大学	法律経済学部	オーストラリア	荒川 宣三	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋マネジメント学部教授	日本
スティーン, ピーター	マコーリー大学	大学院マネジメント学部部長	オーストラリア	高元 昭純	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋マネジメント学部教授	日本

◎シンポジウム出席者【第二部】(順不同)

氏名	所属	役職	国名	リー, ソンキュン	漢城大学	総長	韓国
平松 守彦	大分県	知事	日本	ヴィリアコルク, ウィルフリド・V	デ・ラ・サール大学	ユーチェンコ東アジア研究センター所長	フィリピン
船橋 洋一	朝日新聞社	特別編集委員	日本	カセム, モンテ	立命館大学	国際教育・研究推進機構長	日本
ブラドック, リチャード	マコーリー大学	大学院マネジメント研究科長	オーストラリア	坂本 和一	立命館アジア太平洋大学	学長	日本
シャオ, シンファン	中央研究院研究員 国立台湾大学	東南アジア研究計画責任者 教授	台湾	慈道 裕治	立命館アジア太平洋大学	副学長・アジア太平洋マネジメント学部教授	日本
ジェフリー, マイケル	マコーリー大学	環境法研究センター所長	オーストラリア	鈴木 綾子	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部長	日本
キー, ブーコン	チャイニーズ・ヘリテッジ・センター	所長	シンガポール	福井 捷朗	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部教授	日本
クワック, サンキュン	高麗大学	国際研究大学院研究科長	韓国	マニ, A.	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部教授	日本
リー, ヨンジョ	慶熙大学	太平洋圏国際研究大学院副研究科長	韓国	イーズ, ジェレミー・S	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部教授	日本
モストウ, ヨシュア	プリティッシュコロンビア大学	アジア研究学部助教授	カナダ	清家 久美	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部専任講師	日本
ポーター, エドガー	ハワイ大学	ハワイ・アジア太平洋研究学部副学部長	アメリカ	シュ, シン	立命館アジア太平洋大学	アジア太平洋学部専任講師	日本

「社会学（英語シエルタードクラス）」

アジア太平洋学（社会学）



EADES, Jeremy S. 教授
イース ジェレミー

シエルタードクラスの意義

APUにはさまざまな国・地域から学生が集まっています。日本語または英語の運用能力があることが前提で入学しますが、卒業までに日本語基準で入学した学生は英語を、英語基準で入学した学生は日本語を習得することを目標の一つとしています。日本人の学生であれば、通常は高校卒業までに六年間英語を勉強してきており、また入学後、言語科目としての英語の授業を受講しています。APUでは、二回生を終了するころまでには、英語による専門科目講義の受講が可能になっていなければなりません。しかし、そのためには準備が必要です。そこで、その準備段階として設けられ

ているのがシエルタードクラスです。私は英語シエルタードクラスの「社会学」を教えています。

受講するのは英語を母語としない学生であるため、明瞭な声でゆっくり話し、平易な言葉を使用し、キーワードの説明をする必要があります。

複数のレベルの教材を準備

具体的に、私は次のように講義の準備を進めていきます。まず、学内のキャンパス・ターミナルを通してコンピュータ上で見ることができる教材を、一回の講義につき複数のレベルで準備します。

最も易しいレベルは、その回の講義の要点となる部分だけをわかりやすい英語で一ページにまとめたものです。この教材は、私が担当する二クラス合わせて約三百名の学生全員が理解できると思いま

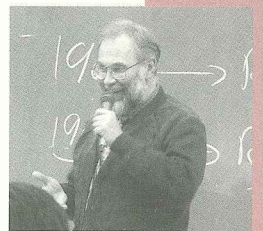
す。次は、実際に講義のときに教室内で使用するパワーポイントのスライドです。これは通常三十〜五十ページにおよび、先の教材よりもう少し詳しく述べてあります。教室ではスクリーンに映し出して使用しますが、学生が自分でコンピュー

タからダウンロード、プリントアウトして授業に持ち込んだり、復習に使用したりすることもできます。

三つめが、「キーリーディング」と呼ぶもので、学生には講義の前に読んで欲しいと思っています。

最後に、自身の講義ノートで、一回の講義につき六〜九ページになります。全体で四〜五万ワードのもので、これをもとに前述三つの資料を作成しています。これは主に英語を母語とする学生のために作成したものであり、シエルタード科目の講義で使用するには長すぎるかもしれません。しかし、トピックに興味があり、かつ読解能力のある学生は、これもコンピュータで見ることができま

す。毎回同じパターンですが、一回の講義の準備に約二日を要します。こうすることで学生はさまざまなレベルからこの科目にアプローチできるわけです。自分に適したレベルのものを選んで授業に臨み、内容が興味深いと思えば、さらに詳しく知るために一つ上のレベルのものを読むこともできるのです。それにより、社会学についてより多くの知識を得られるだけでなく、英語力も向上していくと考えています。



受講生の声



藤原 朝洋
FUJIWARA Tomohiro
● 日本

私がこの社会学を受講するのは、これからの学習の基礎作りのためです。社会学は国際社会で働きたいと思う私にとって必要不可欠なものです。さまざまな社会について学ぶことで社会とはどうあるべきか考えさせられます。というのも、社会学はその言葉の通り、社会学を学ぶものだからです。ある事象を考え、理解するためにはまずその背景を知る必要があります。背景とはつまり、それが帰属する社会、またはその成り立ちです。ですから私は社会学を学ぶことはすべての基礎を学ぶことだと思っています。

社会学の授業が英語シエルタードで行われることは意味深いことだと思えます。この授業では比較的易しい英語が使用されるので、学術的英語に慣れない私たちにも理解することができま

す。私は、この社会学の授業を通して、国際関係の基礎を学ぶと同時に、学術的英語の講義にも慣れ、それを使って討議する力も徐々に身につけていくことを実感しています。

授業では、マイクを使いながらゆつくり明瞭に話すように心がけています。ときには日本語の単語を使用して説明することもありますが、学生たちが私の講義をどれくらい理解しているのか把握しづらいところもありますが、先日初めて五十問の課題を出したところ、ほとんどの学生が合格のレベルを越えていました。

この授業で目指していること

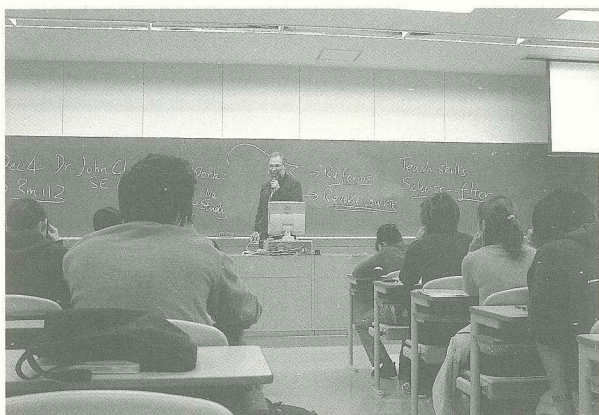
私自身は、母国イギリスで社会人類学を専門に研究してきました。授業の題材にするに相応しい良質な社会学の本は、ほとんど英語で書かれているため、授業では出来るだけ易しいところを選んで引用するようにしていますが、このような書籍の日本語翻訳版が増えるか、または日本語版で書かれた社会学の本が英語に翻訳されれば、学生たちにとってもっと勉強しやすくなるのではないかと感じます。そんな思いもあって、現在私は、日本人学者によって書かれた開発、グローバル化、ツーリズムなどに関する書籍の編集・英語翻訳にも取り組んでいます。

この授業では、社会学の起源と発達をはじめ、今日の社会学者が関心を寄せている主要な理論と概念、そして研究対象となる諸問題についての議論を

行うことを狙いとしています。社会学が扱う分野は大変広く、十四回の講義で何を扱うべきか随分考えました。

今semesterでは、「経済組織と世界システムの発達」「婚姻、家族、性行動」「政治、社会の階層分化、社会統制」「文化、ツーリズム、メディア」などをテーマとしました。具体的な事例の多くはアジア太平洋地域から取り上げつつ、その他の地域の事例も比較の対象として取り上げました。それぞれ興味をもって聞いてくれたと思っています。

自分自身日本語で苦労していますので、学生たちが直面している言語の問題は承知していますが、このsemesterを終えて、どれだけ学生が次の段階に進んでいけるか楽しみにしています。



佐々木 隆史
SASAKI Takashi
●日本

私は将来、世界平和に貢献する事に就きたいと考えています。そのうえで、人間を考察することができる社会学はきつと私の将来に役立つだろうと考え受講しました。また授業言語が英語シエルタードなので、英語を学習途上の私にぴったりだということも受講理由の一つです。

授業の内容は「政治、社会の階層分化、社会統制」「婚姻、家族、性行動」などです。これらのトピックを世界的な視野で、国際学生とともに学習していけることはAPUの大きな利点のひとつだと思います。私はこの授業を通じて「価値観の多様性」について学ぶことができました。授業後にその内容に関して友達と討論することがあるのですが、そのときには様々な考え方があることに驚かされるばかりです。同じ日本人でも様々な考え方の人がいるのに、日本とは環境の異なる場所で育ってきた国際学生の考え方はより多様性に富んでいて大変新鮮です。国の差よりも個人差のほうが大きいと思ったのもひとつの発見でした。

社会学を受講して学んだ「価値観の多様性」を理解し、認め合い、このことを基本としながら、私は自分の将来のために勉強に励んでいきたいと考えています。



山本 祐美加 Elizabeth
YAMAMOTO Yumika
Elizabeth
●日本

人間は一人ひとり異なった性格を持っていて、それを大きく組織化したものが社会であれば、社会は人と同様に多くの性格を持つはず。私の知っているラテン社会と日本社会、この二つの社会構造を比較してみても大きく異なることが理解できます。

また、発展途上国の中には貧富の格差が非常に大きい国があります。それらの国では、貧しい家庭で生まれた子供は学校へいくこともできず、教育を受けられないために仕事につくことができません。従って、生涯貧困から脱出できないという悪循環から抜け出せない社会構造となっています。

私が、社会学という学問を選んだのは、世界に数多く存在する社会の格差に興味を抱き、そこに住むそれぞれの人間が、何を考え、その社会からどのような影響を受けて生活していくのかを学んでみたいと考えたからです。

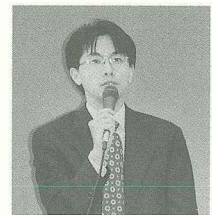
このような事象にアプローチするためには、様々な社会構造・体系・主義を学び、社会のメカニズムを知る必要があります。それを学ぶことにより、貧困層や難民、戦争の犠牲者が生活する社会の解決策を考えていきたいと思っています。



APUで「IT革命と知的財産政策」の講義をおこなって



APUでは、秋 Semester において通商産業省から講師を派遣していただき MITI 大学講座「アジア太平洋時代における通商産業政策」と題する連続講義を開催しています。その第5回として11月24日に開催された「IT革命と知的財産政策」の講師を務めていただいた金子知裕氏にAPUや学生についての印象を語っていただきました。



通商産業省産業政策局
金子知裕氏

今回の私の講義のテーマである、ITの分野において国際間の法律をめぐる調整をどのように行うのか、そのルールづくりについて学生の皆さんの関心の高さがうかがえました。わずかなキャンパス滞在時間でしたが、アメリカの大学のような雰囲気と学生のフロンティア・スピリットとでもいうような熱気を感じることができました。

私も通商産業省入省後、アメリカの大学に二年間留学した経験がありますが、その時につくづくと感じたのは、世の中には実にいろいろな人間がいて、様々な考え方があり、ものごとく感じました。それがここ APU では、日本にいながらにして価値観の多様性を理解する機会に恵まれています。この多様性の中から個性溢れる人材が生み出されて来るのではないのでしょうか。ぜひ、ここで学生の皆さんが個性をぶつけ合って、お互いに多くのものを吸収して世界のあらゆる分野で活躍してほしいと念願しています。

私も次の機会には、APUの学生の皆さんとディスカッションをしたいと願っています。

第5回 11月24日

「IT革命と知的財産政策」

講師：通商産業省産業政策局知的財産政策室
課長補佐 金子知裕氏

内容：IT革命の進展を背景として、経済のインフラとしての重要性を増しつつある知的財産制度の整備・強化について



立命館アジア太平洋大学でのMITI大学講座シラバス

「特殊講義（アジア太平洋地域理解科目）」

九州通商産業局

I. 授業のねらい

通産省における政策立案プロセスやその社会経済背景、政策の具体的な展開状況等について講義することを通じて、通産政策および我が国経済社会の動向に対する理解の促進を図るとともに、日本およびアジア太平洋地域の学生たちとのオープンかつ多様な議論を交わすことにより、新たな政策ニーズ獲得の機会を確保する。

II. 授業方法

毎回の授業ごとに資料を配布のうえ、必要に応じて資料を参照しつつ講義を行う。また、講師による一方的な講義のみではなく学生との質疑応答・ディスカッションも可能な限り実施。

III. 毎回の授業の概要

新規産業育成、国際化、情報化、産業技術振興、地域活性化、エネルギー

ギー・環境問題への対応など通商産業政策全般に係る幅広いテーマについて講義することにより、我が国経済社会の動向と通商産業政策のダイナミックな展開状況についての理解の促進を図る。

〔金曜日4時限（14：15～15：50）〕

● 授業科目名

「特殊講義（アジア太平洋地域理解科目）」

（授業通称名：「アジア太平洋時代における通商産業政策」）

● 講師

講師については、通商産業省本省の職員、九州通商産業局における各政策の担当課長等で構成し、テーマ毎に輪番制で講義を行う。11講義のうち、通商産業省から5回、九州通商産業局から6回を予定している。

キャリア開発プログラムの紹介

進路・就職委員会委員長 APU副学長
伊藤 昭

はじめに

APUは、これから飛躍的に発展していくアジア太平洋地域において、優れたリーダーシップを発揮し、世界を舞台に活躍できる人材を育成することを目標のひとつとし、閲字しました。

APUのマルチカルチュラルな環境と質の高い教育を通じて、学生が成長を遂げ、どのような人材を輩出できるか、そのことによってAPUの真価が国際的に問われることとなります。

APUでは、四年間の学生生活を「キャリア形成」という大きな枠組みでとらえ、正課教育と能力開発、進路指導を一体化したものと位置づけています。これは、学生の卒業後の進路を「就職」という言葉で表現してきた時代から、雇用環境や個人の就業意識も大きく変化し、個々の自己責任による「キャリア」を考える時代に明確に移行してきていることとも関係しています。

APUでは、全学生に対して、一回生時から一人ひとりの進路希望やその過程を「キャリア・チャート」に整理し、目標を実現するための適切なアドバイスを行うとともに、将来のための目標づくりから、その実現のための

メニューづくり、実際のプログラムの提供まで、きめ細かなサポートを行っています。

その最も大きな柱ともいえるべき「キャリア開発プログラム (Career Development Program)」は、学生たちの将来に大きな影響を与え、二年後、三年後の進路・就職を決定付けるといっても過言ではありません。

APUのキャリア開発プログラム

近年の厳しい就職状況は全国の大学・学生に大きな課題を投げかけています。APUの早期卒業プログラム (三回生卒業制度) 履修生が、卒業を迎える二〇〇三年春も今以上の状況が予想されます。APUではキャリア・オフィスを中心としたサポート体制を確立し、入学時点からのきめ細かな支援を実施しています。まず、新しいサポートシステムを実施するにあたって、その意思決定をすばやく行うための機関として「APU進路・就職委員会」「同運営会議」を開学前から設置し、具体的プログラムをまとめ、開学と同時にそれをスタートさせました。これが「APUキャリア開発プログラム」(以下、

プログラム) です。入学後まもなく「進路・就職ガイダンス」を実施するとともに、プログラムのスタートにあたっては全学生の進路意識調査を実施し、一人ひとりの希望進路や目標、学生生活に対する意識を正確に把握することに努めてきました。希望進路や学びたい学問領域などに関するデータは「キャリアチャート (個人カルテ)」として管理し、今後の進路意識の変化や履修に関する援助・相談に役立てる予定です。毎年、同様の調査を全学生対象に継続して実施し、低回生からのプログラムと学生生活が、学生の意識やその成長にどのように寄与しているのか、その変化を把握していきたいと考えています。

●本年度の実施プログラム

まず、学生の意識啓発を目的にした「APU トップ講演会」を開催しました。講演会には毎回五百名を超える学生が参加、学生たちの進路意識の高さをつかがわけています。第一回は平松守彦大分県知事、第二回は西室泰三東芝代表取締役会長、第三回は明石康元国連事務次長をお招きしました。本年度最終開催となる第四回目は、新春、日本一BM椎名武雄最高顧問にご講演

〈トップ講演会・業界別連続講演会〉

APUでは、国際的な規模で発展する企業や国際機関・団体など、各界のトップの方々をお招きしてグローバルな視野でのキャリア形成を目指す「APUトップ講演会」を開催しています。世界の政治・経済におけるトピックを知るとともに、学生が常に取り組みべき課題を明確に意識し、将来への大きな夢と進むべき道を見つけ出してくれることを願っています。また、様々な業界の第一線でご活躍の方々を招いての「業界別連続講演会 (キャリアセミナー)」や立命館大学の卒業生との懇談会も開催しています。これらの講演は、APUで学んでいることと社会との関わり、社会が求めている人材像を入学時点から常に意識させ、「大学でやるべきこと、学ぶべきこと」を各人が明確にすることを目的としています。

いただく予定です。また、企業が求める人材ニーズなどを業界別につかがう機会として「業界別連続講演会 (キャリアセミナー)」を提供しています。今年、マスコミI (出版)、マスコミII (放送)、国連・国際機関、観光産業、金融業界、NGO・NPOの六講座を十一月一日から毎週水曜日の午後開催してきました。

さらにこれらの企画に刺激を受けた学生の中から生まれた「ワークショップ (学生の自主活動)」も、キャリア・オフィスの支援を受け、自分たちの目

標実現のために本格的な活動を始めています。研究棟の一階、キャリア・オフィスの広々としたスペースを活用し、朝早くからいくつものグループが熱心にディスカッションを行っています。現在は、将来の起業家をめざすサークル「アントレプレナーズ（部員…三十五名）」や「UNS 国連サークル（部員…十三名）」「会計研究会（会員…二十名）」「ツーリズムを考える会（公会員…二十五名）」などが活動しています。

なかでも「アントレプレナーズ」は、将来のビジネス展開の土台を築き上げることを目的に様々な活動を行っています。例えば「サクセス講演会」です。十一月二十九日には第四回講演として「成功と失敗のボーダーライン」と題し、講師には現在、企業コンサルタントとして活躍中の板倉雄一郎氏をお招きしました。「アントレプレナーズ」が構想中の企画には、地元貢献策の一環として計画している「子供コミュニケーションシ



第1回トップ講演会
大分県知事 平松守彦氏
「アジアとの共生～ローカル外交と一村一品運動～」



特別講演会「アジア市場における21世紀のビジネス」
前駐日フィリピン共和国特命全権大使
ユーチェンコ企業グループ（フィリピン）会長
アルフォンソ・T・ユーチェンコ氏

ョン語学塾」や自主制作の小冊子「自分たちで作る企業用語集」「APU学生のための就職活動ABC」などがあります。いずれは、全国学生ベンチャーネットワークを設立したいとの夢も描いているようです。

「ツーリズムを考える会」では、観光ホテルの現状を若手経営者とともに調査・分析し、地元観光産業への改善提案（プレゼンテーション）を行うなど積極的な研究活動も展開しています。

これからのキャリア支援

学生の卒業後の活躍やその評価が、これからのAPUの社会的評価を決定付けるといえます。また、新卒者の入社三年以内の退職率が三割にも達している現在、大学の就職担当部署に求められているのは、従来型の求人情報公開や就職活動ノウハウを提供するだけ

学生主催の講演会

【アントレプレナーズ主催】

- 第1回サクセス講演会
『21世紀の起業家像』
立命館アジア太平洋大学
アジア太平洋マネジメント学部 肥塚浩助教授
- 第2回サクセス講演会
『学生ベンチャーの実態について』
立命館大学経営学部 久原正治教授
- 第3回サクセス講演会
『学生としての起業～その動機とプロセス～』
株式会社ジョブウェブ 代表取締役 佐藤孝治氏
- 第4回サクセス講演会
『成功と失敗のボーダーライン』
元株式会社ハイパーネット
代表取締役社長 板倉雄一郎氏

【UNS（国連サークル）主催】

- 第1回ピース講演会
『NGO's: Helping to Build a Culture of Peace in the 21st Century』
インドNGO団体「Ashita No Kai」
会長アーミン・モーディ氏

立命館アジア太平洋大学「トップ講演会」

- 第1回トップ講演会
『アジアとの共生
～ローカル外交と一村一品運動～』
大分県知事 平松守彦氏
- 第2回トップ講演会
『Global Market Trend and Toshiba's Challenges』
株式会社東芝 代表取締役会長 西室泰三氏
- 第3回トップ講演会
『国際社会における日本の役割～国際貢献とは～』
日本予防外交センター 会長 明石康氏
(元国連事務次長)
- 第4回トップ講演会（予定）
『異文化との共生～日本アイ・ビー・エムの歴史から～』
日本アイ・ビー・エム株式会社
最高顧問 椎名武雄氏
- 特別講演会
『アジア市場における21世紀のビジネス』
前駐日フィリピン共和国特命全権大使
ユーチェンコ企業グループ（フィリピン）会長
アルフォンソ・T・ユーチェンコ氏

ではなく、学生と企業の皆様のニーズをつなぐ、キャリアアクセスメント業務です。APUでは、インターンシップへの参加、エクステンション・プログラムの整備などプログラムのさらなる充実をはかり、明確な職業観の育成と環境づくりに努めます。二年目以降もTOEIC講座をはじめとする多彩なエクステンション・プログラムを提供

します。また、学生の活動を積極的に支援するネットワークシステム（キャリアアセンダー衣笠、キャリアアセンダーBK C、東京オフィス、大阪オフィス、インドネシア事務所、韓国事務所）も確立し、国内の大都市圏や海外での就職活動・情報提供に対しても、丁寧な支援が可能となります。

Career Development Program

トップ講演会で明石康氏がご講演

●講演後の学生との懇談会



でも初めに開催される世界報道写真展の初日でもあり、講演前には明石氏に同写真展をご覧いただき、ご見学いただきました。民族紛争に関わる写真などをご覧になりながら、「国連が直面する問題をよく表している」と感慨深げでした。

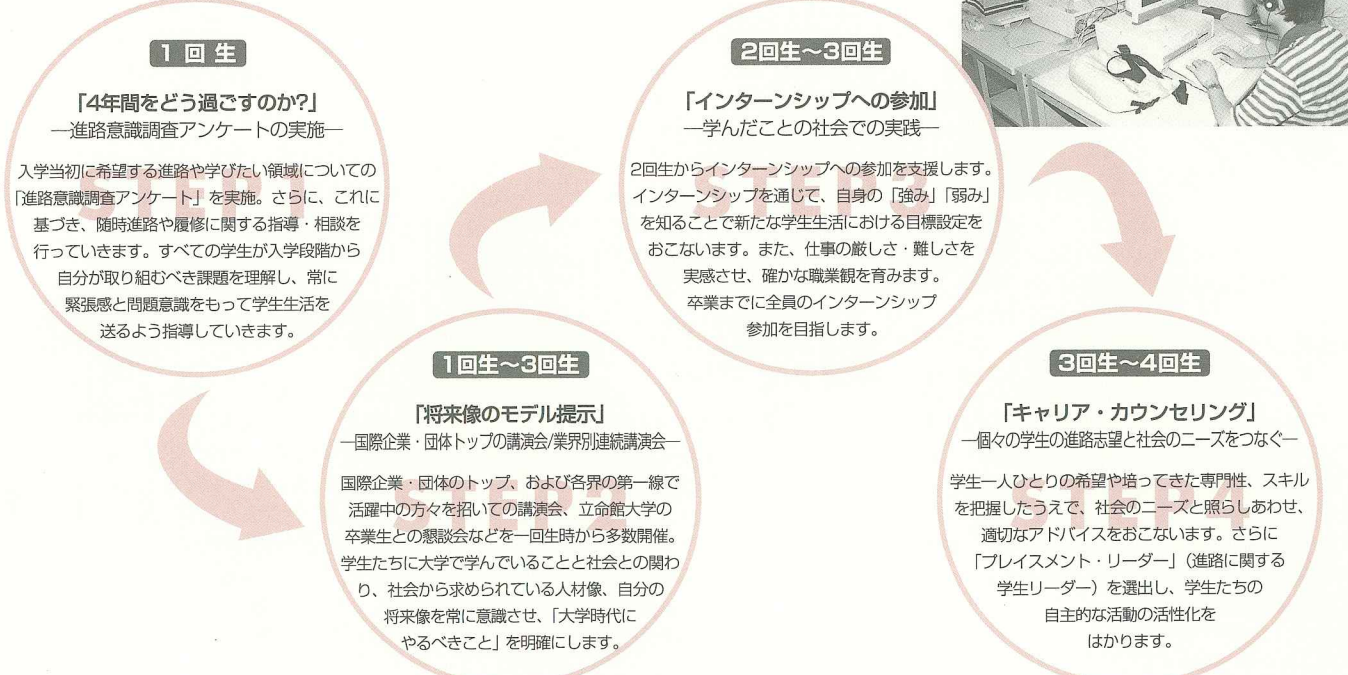
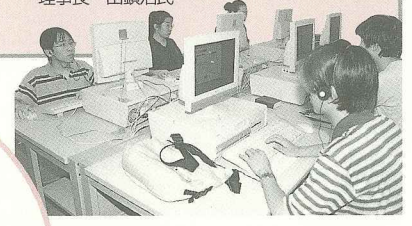
「国際社会における日本の役割―国際貢献とは―」をテーマに、国際社会の平和と安定のためには、日本がさらに積極的に経済的・文化的貢献をすべきであることを強調されました。また、国連に勤務されていた際に平和維持活動に関わった経験を振り返りながら、平和にむけた各種の取り組みを持続し、発展させていくことの大切さと難しさについても語られました。

講演後は教室棟の場所を移し、学生との懇談会が行われました。学生からは活発な質問が相次ぎ、一つひとつの質問に丁寧に回答される明石氏の姿が印象的でした。また、この日はちょうどAPUキャンパスで初めて開催される世界報道写真展の初日でもあり、講演前には明石氏に同写真展をご覧いただき、ご見学いただきました。民族紛争に関わる写真などをご覧になりながら、「国連が直面する問題をよく表している」と感慨深げでした。

十月十八日、元国連事務次長で現在日本予防外交センター会長をおつとめの明石康氏による講演会が開催されました。明石氏には、APUのアドバイザー・コミッティ委員にご就任いただいています。キャリア開発プログラムの一環として行われているトップ講演会は、今回で三回目を数えます。講演会には学生や市民の方々を含め、約七百名の参加者があり、ミネリアムホールは満席となりました。

業界別連続講演会 (キャリアセミナー)

<p>● マスコミ I 出版 日 時：2000年11月1日 15:00~16:30 テーマ：「出版業界ではたらくということ～日本と米国の出版業界の現状と今後の展望～」 講 師：株式会社講談社 取締役 松岡直昭氏 (日本雑誌広告協会事務理事、立命館大学法学部1966年卒)</p>	<p>● 国連・国際機関 日 時：2000年11月22日 15:00~18:00 テーマ：「国連・国際機関を目指すあなたへ」 講 演 I 「国連ではたらくということ」 APU アジア太平洋学部長 鈴木糸子教授 (元国連本部経済社会局長) 講 演 II 「国際公務員就職ガイダンス」 外務省国際機関人事センター所長 伊藤光子氏</p>	<p>● 金融業界 日 時：2000年12月13日 15:00~16:30 テーマ：「これからの金融業界～金融の新たな潮流～」 講 師：APUアジア太平洋マネジメント学部 荒川宜三教授 (大和銀総合研究所顧問)</p>
<p>● マスコミ II 放送 日 時：2000年11月15日 15:00~16:30 テーマ：「ジャーナリストという仕事～泣き笑い・テレビ特派員の生活～」 講 師：株式会社東京放送 (TBS) メディア国際室 国際部長 岡本英信氏</p>	<p>● 観光産業 日 時：2000年12月6日 15:00~16:30 テーマ：「ツーリズム・ビジネスという仕事」 講 師：APUアジア太平洋学部 小方昌勝教授 (前国際観光振興会理事)</p>	<p>● NGO・NPO 日 時：2000年12月20日 15:00~16:30 テーマ：「仕事としてのNGO・NPO」 講 師：熱帯農林技術開発協会 理事長 田鎖浩氏</p>



第1回学園祭 "APU FESTIVAL" 開催される！

11月4日・5日、APUキャンパスにおいて第1回学園祭 "APU FESTIVAL" が開催されました。両日とも秋の晴天に恵まれ、開学時から国際学生のホームステイ・ホームビジットの受け入れやアルバイトの斡旋等でご協力下さった方々をはじめ、20,000名を超える市民の方々に来場いただきました。



”APU FESTIVAL”の開催にあたっては、学生による学園祭実行委員会が結成され、授業の合間をぬって企画会議を行うなど、開催に向けての準備をスタートさせました。

開学後初めての学園祭であり、また上回生のいない一期生だけの実行委員会ということもあり、開催までには数え切れない紆余曲折がありました。APUらしさを前面に打ち出した、APUにしかできない企画を具体化することができました。

当日は、予想をはるかに上回る二〇、〇〇〇名を超える市民の方々が訪れて大盛況となり、当初より学園祭開催の意義として実行委員会が掲げてきた「学生の手により地元市民との交流を生み出す重要な契機とする」ことができました。また、「学生同士のコミュニケーションのあり様」に関しても、学園祭開催にむけての様々な準備過程で、新たな交流や協力関係が生まれ、学生自らの手による学生諸活動の盛り上げの気運が高まってきました。

メインステージ企画

キャンパスの中央、噴水周辺広場に設置されたメインステージでは、チャリダーやAPU



神楽社など、多数のサークルによるパフォーマンスに始まり、アジア太平洋各国・地域の料理コンテスト、APUや地元大分・別府に関する「APU Quiz」などが市民参加のもとで行われました。また、10月に入学したタイ・ラオス・インドネシア・ブルガリアからの新入生による国際色豊かなパフォーマンスが披露されました。

2日目には軽音楽サークルなど5グループによるコンサート、各国伝統衣装を披露する「APU COLLECTION 2000」、アジア太平洋各国の舞踊が勢揃いした「APU DANCE☆SHOW」など盛りだくさんの内容でした。

立命館大学茶道研究部・APU茶道部 合同茶会

開催初日、立命館大学茶道研究部とAPU茶道部による合同茶会が催されました。茶道裏千家淡交会大分支部のご援助ご指導を得て、教室棟アトリウムにおいて「立礼（りゅうれい＝椅子に腰かけて行う茶道の点前形式）」を催しました。会場には多くの学生・市民が訪れ、両大学茶道部の学生による点前を楽しみました。

バスケットボール・サッカー交流試合

APUには、既に30を超えるスポーツ系サークルが結成されていますが、なかでも活発に活動している「バスケットボール部（APU Dolphins）」と「サッカー部（INTORAS FC）」が、大分県内の他大学との交流試合を行いました。

大分大学体育会バスケットボール部と対戦したバスケットボール部は、序盤、大きなリードを許したものの、終盤に逆転し65対55のスコアで勝利しました。

また、2000年全国大学サッカー選手権大会にも出場した日本文理大学サッカー部（九州学生1部リーグ/秋2位）と対戦したサッカー部は、1対6で敗れはしたものの、強豪相手に一矢を報いました。

バスケットボール部・サッカー部とも、初めての対外試合であり、本学学生の盛大な応援を受け、緊張気味でしたが、いずれも今後の飛躍を期待させるゲームとなりました。

学生模擬店・フリーマーケット

メインステージ周辺広場には、サークルや学生グループによる模擬店32店舗が出店されました。その多くは、アジア太平洋各国・地域の料理を扱う食品模擬店で、インドネシアのナンゴレン、ラオスのシュリンプチップス、沖縄そば・サターアングギー、餃子・春巻などは各国・地域の出身者が調理し、特に人気を集めました。普段食べられない料理を求めて、学生・市民が長蛇の列をつ

くりました。

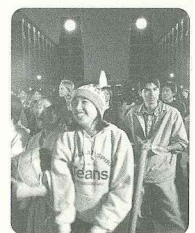
また、2日目には、体育館において市民によるフリーマーケット・バザーが開催され、およそ50の市民グループが出店しました。5時間足らずの営業時間内に5,000名を超える学生・市民が訪れ、会場内は立錐の余地もなく、大変な熱気に包まれました。

Asia Student Carnival

「Asia Student Carnival = ASC」は、「吉本興業インターンシッププログラム」を経験した立命館大学政策科学部の4回生が中心となって結成したイベントサークルで、「これからの地域ネットワークの役割」「若者が語る国際社会」などをテーマとしたワークショップや尾野徹氏（財団法人ハイパーネットワーク社会研究所 理事）を迎えての講演会『21世紀に向けて～「キョウセイ」のコミュニティ』を開催し、「APU FESTIVAL」に学術的色彩を盛り込んでくれました。

後夜祭

「APU FESTIVAL」の最後に催された後夜祭では、APUの地元亀川地区に伝わる伝統文化「亀川地踊り」（協力：亀川地踊り保存会）を学生・市民が輪を作って踊り、またAPU学生DJ、ダンサーによるパフォーマンスの後、締めくくりとして学園祭の成功を祝う花火が打ち上げられ盛大なフィナーレとなりました。



女子陸上競技部 早くも九州No.1 を獲得!



九州学生陸上競技選手権大会で好成績

A P U の重点強化クラブとして位置付けられ、北山吉信監督の指導のもと育成強化を図ってきた女子陸上競技部（中・長距離／部員数四名）が、十月二十一～二十二日、福岡県久留米市で開催された「第二十八回九州学生陸上競技選手権大会」において、早くも好結果を残しました。

今春入学予定の新入部員にも逸材が揃っています

二〇〇一年度の目標は、九州地区で一位もしくは二位となって、全日本大学女子駅伝へ出場することです。今春の新入部員として次の有望選手五名が既に本学に合格し、今秋の九州地区予選には磐石の布陣で臨める見通しです。国際学生の有望選手も現在選考中です。

また、立命館大学女子陸上競技部は、昨年の全日本大学女子駅伝において二位に入賞しており、両校で優勝を争うことが夢です。

■新年度入学予定者

- 河野 裕子（大分県私立東明高校）
- 後藤 佳美（大分県立竹田高校）
- 坂本 春華（長崎県私立西海学園高校）
- 久枝 千恵（長崎県私立瓊浦高校）
- 金子 智佳（福岡県私立九州女子高校）

【監督からのメッセージ】

新年あけましておめでとうございます。
女子陸上競技部は開学と同時に部員四名（日本人学生二名・エチオピアからの国際学生一名）でスタートを切り、二〇〇一年に全日本大学女子駅伝出場、二〇〇三～四年には上位入賞・優勝を狙えるチームづくりを目標として日々練習に取り組んでいます。われわれのモットーは、約束・規則を守り、お互いが助け合いい、素直さと感謝の気持ちを大切に、良識ある学生であることです。また、当然のことながら学業と競技生活との両立を前提に活動しており、部員の学修活動にも目を配りながら指導を行なっています。

二〇〇〇年度の競技成績は、前記の通り「第二十八回九州学生

陸上競技選手権大会」において二種目を

制覇するなど、好成績を収めることができました。これは選手自身が、一日二回（早朝一時間、夕方二～三時間）の練習のほか、夏期休暇や休日を返上しての猛練習に耐えた成果であるといえます。

最後になりましたが、皆様方のあたたかいご声援とご協力のおかげで、所期の目標の達成に向けて順調にスタートを切ることができました。心より御礼を申し上げますとともに、今後ともご理解とご声援を賜りますようお願い申し上げます。

A P U 女子陸上競技部 監督 北山吉信



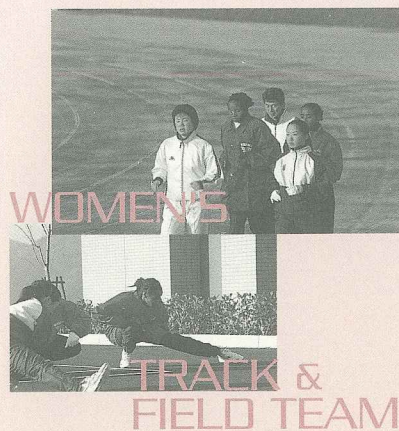
略歴

北山 吉信（きたやま よしのぶ） 監督
1948年生まれ
大分県中津市出身
1967年 旭化成工業株式会社入社、陸上部入部
1967年3月～1981年3月 選手
1981年3月～1988年3月 コーチ
[ベスト記録：マラソン 2時間13分24秒]
2000年2月 立命館アジア太平洋大学
女子陸上競技部監督に就任
（旭化成工業株式会社より出向）

第28回九州学生陸上競技選手権大会

（会場：久留米市陸上競技場）

- 女子 800m
[2位] 2' 21"06
ウォッセン・ベクレ（エチオピア出身）
- 女子1500m
[1位] 4' 43"42
佐藤 由布子（大分県立雄城台高校出身）
- 女子5000m
[1位] 17' 22"53
ウビ・タデッセ（エチオピア出身）



2001年度 国際学生および国内学生 受け入れの見通し

▶ 2001年度 国際学生募集状況



APUでは、46カ国・地域からの421名の国際学生が旺盛な意欲を持って学んでいます。毎年400名の国際学生を受け入れるという目標は、初年度においては達成することができました。また、2003年度までに50カ国・地域からの国際学生を受け入れるという目標に鑑みますと、初年度46カ国・地域から国際学生を受け入れることができたことは画期的な到達点といえます。これは、アドバイザー・コミッティをはじめとする皆様のご支援ご協力による「国際学生奨学金」を大きな力として、日本で学ぶことを熱望する青年たちの夢が叶えられた結果です。

さて、2001年度の国際学生の募集ですが、4月および10月に各200名ずつの入学を予定しています。4月入学の合格者は、2000年12月10日時点で262名、最終的には約300名となる見込みであり、2000年4月入学の実績をもとにすれば、今春4月には目標としている200名の国際学生が入学してくると予想できます。

また、現在APUに在籍していない国・地域からの出願は、アフリカや東ヨーロッパ地域を中心に7カ国・地域となっており、2001年度には世界の50を超える国・地域からの学生がAPUで学ぶことが確実となっています。

APUでは世界各国・地域の350を超える教育機関と協定を結び、また外務省や駐日大使館などのご理解ご支援により、安定的に国際学生を受け入れることのできる仕組みづくりに日々努めており、開学2年目の募集においてはその成果が表れつつあります。それに加え、本年度の国際学生募集活動の取り組みにおいての前年度との最も大きな違いは、今年入学したばかりの国際学生が、いろいろな協力を行ってくれていることです。たとえば、自国の後輩、友人、さらには卒業した学校の先生に向けて、自ら手作りでパンフレットやビデオレターを作成しAPUの良さをアピールしたり、夏休み中の帰国にあたっては各人が自主的に学生募集パンフレットを大量に持ち帰ってくれるという状況が生まれました。

このような学生の様々なレベルでの協力に励まされ、APUを学生・教職員が一緒になって創造していることを実感しながら、4月そして10月に大志ある学生を受け入れることができるよう、引き続き戦略的かつ細やかな募集活動を展開していきます。

◆ 現在の合格者 (国・地域別)

韓国	105	インド	9	ガーナ	4
中国	18	スリランカ	16	ナイジェリア	4
台湾	3	バングラディシュ	4	マリ	1
モンゴル	1	パキスタン	7	セネガル	1
インドネシア	6	ネパール	3	エチオピア	2
マレーシア	3	シリア	1	ザンビア	1
ベトナム	21	オーストラリア	5	カナダ	2
タイ	1	ニュージーランド	3	ブルガリア	2
シンガポール	3	パプアニューギニア	4	ロシア	1
カンボジア	1	サモア	2	リトアニア	3
ラオス	1	パラオ	1	アメリカ	3
ブータン	1	ジンバブエ	2	合計	262
ミャンマー	2	カメルーン	1		
フィリピン	6	ケニア	8		

▶ 2001年度 国内学生募集状況

昨年度は、4500名を超える志願者が全国から集まりました。現在APUでは484名の国内学生が学んでいます。2001年度の国内入試ではすでにAO（自己推薦方式）入試、帰国生徒入試、編入学試験等をおこなひ、これらの入試で合格したAPUを第一志望とする優秀な学生が入学手続きを開始しています。

2月にはいよいよ一般入試が始まります。今年度より新たに「センター試験利用方式」を導入するなど、一層優秀な学生を受け入れるための準備を進めています。



船橋洋一先生と語ろう 「アジア太平洋の未来」

International Symposium for APU Students "The Future of the Asia Pacific"

十一月十日、朝日新聞社編集局特別編集員・コラムニストであり、APUの客員教授にご就任いただいている船橋洋一先生を迎え、「アジア太平洋の未来」をテーマに、初めてのAPU国際学生シンポジウムを開催しました。

今回のシンポジウム開催にあたっては、船橋先生の著書や論文を題材とした事前勉強会も行われるなど学生の間で積極的な取り組みが数多く見受けられ、当日は、百名を超えるAPUの学生・教員が参加しました。



ご講演のなかで船橋先生は、冷戦後の新たな世界秩序が作られつつある現状において、世界のなかで日本が担うべき役割や抱える課題について、三点にわたって語られました。

第一に、日米関係のあり方については中国を見据えた形で検討すべきであり、日本はアメリカ・中国両国との良好な関係を維持していく必要があること、第二に、日本は歴史上アジアにおいて常に経済的にトップの位置にあるとされてきたが、現在の中国をはじめとするアジア各国・地域の経済は日本を目標とし成長を遂げており、特にITの分野では日本は後発ともいえる状況であり、そうした現状に的確に対応していく必要があること

と、そして第三に、これまで西側諸国として一つのまとまりを見せていたアメリカ・ヨーロッパ・日本の三者関係において、以前ほどの緊密さが見られなくなっているという世界情勢に対応していくために、日本には強力な政治的リーダーシップが必要とされていることなど、非常に興味深い見解を提示くださいました。質疑応答の時間には、事前勉強会を重ねてきた学生たちが次々と挙手し、「外国人の起業家が日本でビジネスを興した際の展望」など、将来への夢を念頭においた質問が多く出されました。船橋先生はユーモアを交え回答され、また先生からも学生に訊ね返されるなど、ディスカッションは大変な盛り上がりを見せました。講演終了後も質問が相次ぎ、先生を囲んでの懇談が続きました。

すべてを英語で行った今回のシンポジウムの成功は、学生たちに大きな自信を与え、今後このような企画を継続して開催していくための土壌が、APUの学生のなかにも育った意義深いシンポジウムとなりました。



【船橋洋一氏 略歴】
朝日新聞社において、編集委員、アメリカ総局長、北京特派員、ワシントン特派員などを歴任。主な著作に「内部一ある中国報告」（サントリー学芸賞）、『通貨烈烈』（吉野作造賞）、『アジア太平洋フュージョン-APECと日本』（アジア太平洋大賞）、『同盟漂流』（新潮学芸賞）など。1992年、慶應義塾大学法学博士号取得。

【学生のコメント】

SCUMPIERU, Mihai

●ルーマニア

「アジア太平洋の未来を考える」というテーマについて、幅広く議論が展開されました。私は学生として多くのことを学んだにとどまらず、違うアジア地域から集まった学生たちと直接意見交換ができ、自分の視野が広がったように思います。また、アジア太平洋地域が世界の中で、ますますその役割を拡大しているということも十分に理解できました。

CHOWDHURY, Shradha

●インド

今まで国連などの主催する会合には参加してきましたが、このようなジャーナリスティックな視点からのシンポジウムへの参加は初めてでした。現在の国際関係が非常によく理解でき、非常に有意義なシンポジウムでした。

谷田 朋美

●日本

堪能な英語で質問をする国際学生を前に少したじろぎましたが、船橋先生とAPUの言語教育システムに関して意見を取り交すことができました。「自分の意見に自信を持てていい」と先生にいわれ、純粋に自分の意見を聞いてほしいとの思いで発言しました。この経験によって、自分の意見に対する自信と、それを人に伝える勇気を身につけることができたと感じます。

加藤 徹生

●日本

シンポジウムは、私たちAPUの学生にとって大変刺激的なものでした。内容はAPUの国際性を反映して、日本国内の問題にとどまらず、話題の柱は、常にアジアを中心とした「世界」でした。

カンボディア王国の

マリイ・ラナリット皇太子妃殿下が APUをご視察

十月二十一日、カンボディア王国のマリイ・ラナリット皇太子妃殿下ご一行がAPUをご視察されました。この日APUを訪れたのは、マリイ・ラナリット皇太子妃殿下、ソク・アン官房長官、イン・カンサ・ファービー婦人退役軍人省長官、セン・アイ・アンニャ官房長官夫人、ロス・プリポーン在日カンボディア王国特命全権大使夫人の方々です。

正門前で、APU学長・副学長がお出迎えしたのち懇談に入り、妃殿下の来学を記念するプレートに妃殿下と学長が署名されました。

また、現在APUで学んでいるカンボディア

出身学生ヴェスナ・テップさんから妃殿下ご一行へ花束贈呈が行われるなど、和やかな雰囲気
で懇談は進み、無事ご視察の日程を終えられました。

● ラナリット皇太子妃殿下 (中央)



TOPICS on APU

別府を舞台に「第七回アジア九州地域交流 サミット大分会議」が開催される

十月二十日、二十一日の両日、別府市のビームプラザにおいて、「第七回アジア九州地域交流サミット」が開催されました。「二十一世紀のアジアを創造する人材育成と環境」をテーマに開催された今回の大分会議には、世界十二カ国・三十七地域の自治体や団体の代表者が集い、地域振興や人材育成、環境問題等について意見を交換しました。

二十日のサミット開会行事に続き、まずAPU坂本和一字長が「アジア太平洋の未来創造と人材養成」と題して基調講演を行いました。坂本学長は、二十一世紀はアジア太平洋地域が政治・経済・文化など各分野で世界をリードし、東西の文化が融合した新しい文明を創造する可能性を秘めており、APUが高

等教育機関の一つとしてこの地域の発展と人材育成に貢献していくことを述べました。

つづいて平松守彦大分県知事が議長となって全体会議が行われ、各地域の代表が、地域開発と環境の調和や人材育成の取り組みなどについて、現状と将来のビジョンを発表し、文化遺産保護や廃棄物処理についての意見交換がおこなわれました。

最後に、参加地域の持続的な発展や共通の課題解決のためには、相互協力・交流が重要であるとの共通認識のもと、①環境問題など人類共通の課題の解決に向けた自治体レベルでの知識や技術の交換、②人材の育成のための相互協力、③経済・文化・スポーツなどの分野における交流と連携の推進を目指した共同宣言（大分宣言）が採択されました。

また、二十一日にはサミット大分会議の関連行事として「アジア一村一品セミナー」が開かれ、カンボディア王国のマリイ・ラナリット皇太子妃殿下が「二十一世紀における女性の役割」をテーマに基調講演が行われました。

引き続き、「地域活性化とアジアの共生」「アジアの女性からのメッセージ」をテーマに二つのパネルディスカッションを行い、二日間のサミットの幕を閉じました。



● 基調講演をする坂本学長

TOPICS
on APU

APU開学を記念し
世界報道写真展を開催

十月十八日から二十九日まで、APUスチューデント・ホールにおいて、「第四十三回世界報道写真展「二〇〇〇」」が開催されました。同写真展が九州で開催されるのは初めてのことです。開会式では、主催者である朝日新聞社、世界報道写真財団、立命館大学国際平和ミュージアム、APUの代表者がテープカットを行いました。

今年度は、二二二カ国・地域の三、九八一名の写真家から四二、二二五点の作品の応募があり、そのなかから大賞を受賞した、「コンボから逃れてきた、負傷したアルバニア系の男性」(クラウス・ビヨルン・ラーセン/デンマーク)をはじめ各部門に入賞した作品一九五点が展示されました。

地域紛争、スポーツ、科学、自然などをテーマとする一瞬を捉えた迫力ある数々の写真に、見学に訪れた学生や教職員、市民の方々は真剣に見入っていました。

入場者のアンケートには「世界レベルの写真展が大分で見られるのは歓迎すべきことだ」「戦争の悲惨さを実感した」「ぜひまた開催してほしい」などの意見が寄せられました。

また、世界報道写真財団の梅津貞三氏は「APUの学生には、自国他国で起きている事件事故などに興味を持ち、是非議論を深めてほしい」と語っていました。

開催期間中の入場者は、延べ二、〇二七名のほりましました。



TOPICS
on APU

APU開学記念植樹祭を開催

十一月二日、別府市とAPUは、APUキャンパスの西側に隣接する市有地において、「APU開学記念植樹祭」を開催し、APUの学生はじめ約五百名が参加しました。今回の植樹は、APUの開学を祝うとともに、別府市が取り組んでいる水源涵養林育成事業の一環として行われたものです。

植樹祭では、まず井上信幸別府市長、津末武久APU設置期成同盟会長にご祝辞をいただきました。つづいて坂本和一APU学長が「植樹する木々のように学生たちが別府の街に根つき、大きく成長してほしい」と挨拶、学生代表からは「この植樹をきっかけに環境を守る活動をしていきたい」と、今後の決意が語られました。

植樹記念碑の除幕のち、約一・五ヘクタールの草原に、ケヤキ・モミジ・ヤマザクラ・ヤマボウシ合わせて約千本の苗木を植え、APU全学生の名前をアルファベットで記した記念プレートが各苗木に結ばれました。





発行：学校法人立命館
〒603-8577京都市北区等持院北町56-1
TEL.075-465-8366 (理事長室)

